

絢爛たる美の時代 「桃山—天下人の100年」より

東京国立博物館（上野） 2020.10.06～11.29 前後期で展示替えあり

桃山美術は、「織田信長」「豊臣秀吉」が天下を治めた16世紀後半に最盛期を迎えたが、豪壮で華麗な絵画や工芸品は一夜にして生まれたものではなく、時代が室町から江戸へと推移するなかで徐々に花が開いていったとされる。

本展は、約230件の優品によって、桃山文化の誕生から終焉までの流れを追う企画で、出品作のうち国宝は「17件」重要文化財は「約100件」を数える。

桃山時代に作られた絵画や工芸品は、いずれも華やかで、豪壮で、力強く威圧的で、エネルギーに溢れて17世紀初頭の「徳川家康」時代まで続いた。



狩野山楽《松鷹図襖・壁貼付》部分 1626（寛永3）年 紙本金地着色 左

徳川氏による支配体制が固まりつつある江戸初期の作品で、桃山時代の豪壮な表現を残しつつ、鷹の静かな佇まいが秩序だった時代の訪れを告げている。

狩野永徳《唐獅子図屏風》 16世紀 六曲一隻 紙本金地着色 右

桃山時代の勢いをよく表している作品で、金地を背景に堂々と居並ぶ風が吹く中、前へ前へと進む雌雄の唐獅子の威圧的姿が雄大な画面に描かれている。

長谷川等伯《松林図屏風》右隻 六曲一双 16世紀 紙本墨画 国宝



やまと絵のモチーフである松林のみを、水墨画として描いた作品には、画伯そのものの清新さが凝縮している。伝統的な水墨の主砲を踏襲しつつ、随所に型破りな荒い筆遣いを見せた、霧に包まれた

松林の風情画で幽玄の境地に誘う作品である。通常、屏風の画面は各扇に5ないし4枚の紙を上下に継いで作成されるため、完成時には全ての扇で線は揃うが、多少ズレが見られるのは下絵の作品であったためであるとされている。